

学生ジョブコーチによるポジティブなフィードバックが 特別支援学校生徒の行動の拡大に与える影響

The effect of Positive Feedback by a Student Job Coaches on the Expansion of Behaviors
in Special Needs School Students

○和田 千鶴 高山 仁志 中鹿 直樹

○Chizuru, WADA Hitoshi, TAKAYAMA Naoki, NAKASHIKA

(立命館大学総合心理学部)

College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University

Key words: 正の強化, 行動の拡大, 学生ジョブコーチ

目的

立命館大学では、大学構内に設置された模擬喫茶店舗を用いて、学生ジョブコーチ（以下、SJC とする）による支援の取り組みが行われている。ここでは、単なる職業実習を行うのではなく、どのような援助設定があれば彼らの「できる」が拡大するのかということを発見し記録するという特徴がある（中鹿他, 2013）。これまでにも対象者の「できる」の拡大には、ポジティブなフィードバックを提示し続けることが重要であると述べる先行研究が数多く存在する。本研究では、自発した行動へのポジティブなフィードバックが対象者の創意工夫の表出にもたらす影響について検討する。

方法

場所 立命館大学構内に設置された模擬喫茶店舗

期間 X年9月Y日～X年9月Y+4日の計5日間

対象者 特別支援学校高等部のA（男性、3年生）とB（男性、2年生）の計2名であった。なお、実習を行う前に特別支援学校の教員と対象者2名の保護者に実習についての説明を行い、書面にて実習参加への同意を得た。

実習の一日のスケジュール 対象生徒は午前と午後模擬喫茶店舗にて業務を行った。業務前に、その日の目標の確認と開店準備を学生とともにいった。業務終了後には、振り返りの時間を設けた。

手続き 対象生徒Aは模擬喫茶店舗の店長、対象生徒Bは副店長として、SJCはオーナーとして実習に参加した。3日目に新人アルバイトとして大学生1名が実習に参加し、4日目以降はそれに加えて大学生2名が新人アルバイトとして実習に参加した。

対象生徒は手順書に基づき、接客や会計などの業務を行った。3日目の午後以降は、新人アルバイトも交えて業務を行った。その際、対象生徒は新人アルバイトに業務内容の教示や指示を出すことを求められた。SJCは、対象生徒の行動を近くで見守り、指示や自発した行動に対してポジティブなフィードバックを行った。本実習ではSJCのほか、模擬喫茶店舗内に1名のスタッフが常

駐した。そのスタッフは実習のサポートとSJCと新人アルバイトへの指示や対象生徒へのフィードバックを行った。

結果

対象生徒の自発した行動に対して、即時に賞賛するという流れを実習中に繰り返し行うことで、2名ともに積極的に創意工夫をするようになった。また、SJCが賞賛した行動が繰り返し自発されるようになった。

対象生徒Aは、自発的に業務を分担するという変化がみられた他に、オーナーに相談する行動が増加した。

対象生徒Bは、助けを求める言語行動のほか、業務を他者に依頼、指示する回数が増えた。4日目以降「～お願いします」と敬語で依頼できるようになり、それを強化することでその行動が継続的に生じた。

考察

対象生徒2名ともに日数が経過するごとに自発的に創意工夫をする場面が多くみられるようになった。これらの変化は、高等部の教員から伝えられていた課題でもあり、正の強化によって改善されたともいえる。また、ポジティブなフィードバックが与えられた者のみが強化されるのではなく、それを見たほかの生徒も強化され2名ともが同じ創意工夫を繰り返す姿も見られた。よって、対象生徒の行動を見守り続け、自発した行動を賞賛し続けるという環境設定が彼らの「できる」を拡大することが分かった。彼ら自身で思考したものの表現を他者から認められるということが正の強化子として働き、繰り返し自発されるようになったのではないかと考える。

今後は、対象生徒自身が表現したものをを用いた自己援護・他者援護の研究を進める。

文献

中鹿 直樹他 (2013). プロファイリングからポートフォリオへ: 学生ジョブコーチの実践から支援をつないでいくための「情報」について考える 対人援助学会第5回年次大会発表論文集, 30.